

研 究

母親が評価する子どもの学業困難に影響する
要因の検討

—コホート調査の結果から—

矢口 幸康¹⁾, 関 あゆみ^{1,2)}, 田中 大介¹⁾, 谷中 久和¹⁾, 寺川志奈子⁶⁾
小林 勝年³⁾, 高橋 千枝¹⁾, 小枝 達也^{1,2)}, 内山 仁志⁴⁾, 田丸 敏高⁵⁾

〔論文要旨〕

本研究は親が評価する子どもの学業困難に影響する親側の要因を明らかにするため、114名の小学3年生の親子を対象に、学業困難、子どもの知能・認知能力、親の教育歴、家庭環境などを調査した。調査の結果34名の母親がわが子に学業困難という評価を下しており、評価された子どもの知能や認知能力はそうでない子どもより低かった。一方で、子どもが正常な知能や認知能力を有しながら困難感を持つ母親が13名存在した。このような母親の教育歴はそうでない母親に比べて有意に長く、親の教育歴に基づく期待や養育態度の影響が示唆された。したがって、親が子どもの学業困難を訴える場合、母親側の要因にも注目する必要があるだろう。

Key words : 学業困難, 母親, 教育歴, 家庭環境

I. はじめに

われわれは平成17年から「すくすくコホート鳥取」¹⁾という発達コホート研究を進めている。5歳からの調査研究を通して、幼児期は親子関係に焦点をあて、調査対象児が学童期に入った近年は、子どもを取り巻く学校や周囲の環境に注目してきた。その活動の中で、母親が評価する子どもの学業困難が子どもの生活の質(以下、QOL)に影響することが報告された。

田中ら²⁾がKid-KINDL^{®3)}を用いて小学2年生と3年生の2年間を通じて子ども本人と親に子どものQOLに関する評価を求めた結果、親が学業困難と評価する子どもと親双方のQOL得点が両学年ともに低

いという結果を示した。Kid-KINDL^{®3)}は「身体的健康」、「情動的 wellbeing」、「自尊感情」、「家族」、「友だち」、「学校生活」の6つの下位因子からなる尺度である。3年生の本人評価では下位尺度全てにおいて学習困難と関係する低下がみられた。これは、学業成績が子どもを取り巻く生活全般に影響することを示した結果といえる。

この学業困難が何に基づいて評価されるのか探るとき、第一に評価対象である子ども側に原因が存在することが予想できる。北尾ら⁴⁾は小学校教師に生徒の学業困難を評価させ、「知的能力に遅れがないにもかかわらず学習が困難な子ども」の諸徴候に関する質問紙に回答を求めた。その結果、自己制御、動作性、認知

Factors Influencing Maternal Evaluation of the Child's Learning Difficulties — A Developmental Cohort Study — [2522]
Yukiyasu YAGUCHI, Ayumi SEKI, Daisuke TANAKA, Hisakazu YANAKA, Shinako TERAKAWA, 受付 13. 4. 15
Katsutoshi KOBAYASHI, Chie TAKAHASHI, Tatsuya KOEDA, Hitoshi UCHIYAMA, Toshitaka TAMARU 採用 13. 8. 29

- 1) 鳥取大学地域学部地域教育学科(研究職)
- 2) 鳥取大学地域学部地域教育学科(医師/小児神経科)
- 3) 鳥取大学生涯教育総合センター(研究職)
- 4) 国際医療福祉大学保健医療学部視機能療法学科(研究職)
- 5) 福山市立大学教育学部児童教育学科(研究職)
- 6) 佛教大学社会福祉学部社会福祉学科(研究職)

別刷請求先: 矢口幸康 鳥取大学地域学部地域教育学科

〒680-8551 鳥取県鳥取市湖山町南4-101 すくすくコホート鳥取事務局

Tel/Fax: 0857-31-5958

技能、情緒安定性の4つの因子得点が普通児よりも低かった。これは、評価対象である子ども側に学業評価を規定する要因が存在することを示した結果であり、親が評価する子どもの学業困難も同様に子どもの能力に応じたものといえる。しかし、評価者である親自身も評価に影響する要因を持つことも予想される。

親に自らの育児困難を評価することを求めた研究では、母親自身の抑うつ傾向や被養育歴といった属性や、家族機能の不調、周囲の協力や相談相手の有無などが報告されている⁵⁻⁸⁾。困難を抱えているのが子どもなのか自分自身なのかという点で学業困難と育児困難は異なるが、親が評価を下すという点では一致しており、自身の育児困難評価に影響した母親や家庭側の要因が、他者である子どもに対する評価にも影響する可能性は高い。

そこで本研究は学業困難の評価に影響する親側の要因を探ることを目的とし、先行研究で影響が確認された、親の教育歴、家族機能、相談相手の有無、家庭環境に注目する。併せて、もう1つの規定因である評価対象である子どもの能力の影響も検証する。

II. 方 法

1. 調査対象

「すくすくコホート鳥取研究グループ」に継続して参加する鳥取市内の親子の小学3年生時のデータを主な対象とした。これは、子どもが小学2、3年生になった頃から、保護者からの学業成績に関する相談が増えてきたためである。参加者は2年の時間差を設けた2グループに分けて追跡されており、先行グループは68

名（男子38名、女子30名）、後行グループは46名（男子26名、女子20名）、計114名（男子64名、女子50名）であった。子ども本人とその保護者の回答が分析対象となった。各グループの参加者数推移は表1のとおりである。

2. 調査方法

調査にあたって、子どもおよび保護者には質問紙（親用・子ども用）を郵送し回答を求めた。また質問紙回収と同時に、子どもに対して知能検査や認知課題も実施した。親用質問紙は全て母親による回答であった。

本研究で用いた尺度は以下のとおりである。

- i. 学業困難に関する質問項目「お子様は学校の勉強で困難なことはありますか」。回答は4件法（「①問題はない」、「②やや難しいところがある」、「③ついていけない（かなり難しい）」、「④わからない」）であった。
- ii. 子どもの知能・認知能力検査「WISC-Ⅲ、読解課題、算数課題」。
- iii. 家族環境に関する質問項目「兄弟の有無、習い事の費用、学習面の相談相手の有無、家族アプガー尺度⁹⁾、両親の年収」。
- iv. 親の属性に関する質問「親の教育歴」。

上記4項目・指標のうち i, iii, ivは母親が回答し、iiの各検査は子どもに対して実施した。

読解課題・算数課題はそれぞれK-ABCから参照した7問からなり、3・4年生時に測定した成績を標準化処理しz得点に変換した。

学業困難感に関する質問項目は4件法（「①問題はない」、「②やや難しいところがある」、「③ついていけない（かなり難しい）」、「④わからない」）で回答を求めた。

兄弟の有無は、対象児の兄弟数とその年齢を尋ねた。習い事の費用は、対象児1人に対してかかる一月あたりの塾や習い事の費用を自由記述で尋ねた。子育ての相談相手の有無は、「お子さまの勉強について話せる相手はいますか」という問いに対して「いる」、「いない」の2件法で回答を求めた。

家族アプガー尺度とは家族機能評価尺度としてSmilkstein,G⁹⁾が作成した尺度であり、本研究では塩川¹⁰⁾が和訳したものを使用した。「なにか困ったとき家族はあなたの助けになりますか?」といった5項目に対して3件法（0:ない、1:ときどき、2:いつも）

表1 コホート調査参加者数推移

	5 歳	6 歳	1 年生	2 年生	3 年生
平成17年	112名				
平成18年		100名			
平成19年	80名		90名		
平成20年		69名		78名	
平成21年			72名		68名 (男子38名 女子30名)
平成22年				55名	
平成23年					46名 (男子26名 女子20名)

表2 子どもの能力評価（WISC-Ⅲ，読解課題，算数課題）の成績および検定結果

困難感の有無のみで比較								困難感の有無（FIQ100以上）での比較							
	困難感	N	平均値	標準偏差	t 値	自由度	有意確率 （両側）		困難感	N	平均値	標準偏差	t 値	自由度	有意確率 （両側）
FIQ	なし	78	108.01	11.97	3.48	105	p<.01	読解課題 （z 得点）	なし	54	0.24	0.54	0.45	63	n.s.
	あり	29	98.72	13.00					あり	11	0.15	0.69			
読解課題 （z 得点）	なし	70	0.16	0.57	3.72	98	p<.01	算数課題 （z 得点）	なし	54	0.37	0.12	0.76	63	n.s.
	あり	30	−0.37	0.80					あり	11	0.16	0.19			
算数課題 （z 得点）	なし	70	0.23	0.88	3.83	98	p<.01								
	あり	30	−0.55	1.03											

で評価を求めた。両親の年収については、「200万未満」，「200万以上400万未満」と200万ずつ範囲を繰り上げ，「1,000万以上」までの選択肢から回答を求めた。

親の教育歴については，研究初回参加時に「中学校」，「高校」，「専門学校」，「大学」，「大学院」，「その他」からの選択を求めた。

データ分析には IBM SPSS ver.19を用いた。調査で得たデータのうち，得点の有意差検定にはt検定を用い，度数の有意差検定にはカイ二乗検定とFisherの直接確率検定を用いた。家族アプガー得点はSmilkstein,G⁹⁾に従って算出した。

本研究は鳥取大学地域学部の疫学倫理委員会において承認を受けて行った（受付番号9，承認日平成21年3月5日）。

Ⅲ. 結 果

1. 母親が感じる学業困難感

「i. 学業困難に関する質問項目」に対する回答のうち，「①問題はない」と回答した母親を学業困難なし群，「②やや難しいところがある」，「③ついていけない（かなり難しい）」と回答した母親を学業困難あり群とした。集計の結果，34名（29.8%）の母親がわが子に対して学業困難感を感じていた。

2. 子どもの能力比較

WISC-Ⅲ，読解課題，算数課題について母親が学業困難感を持つ子ども34名の成績を，感じていない子ども80名と比較した（表2）。WISC-Ⅲについては，母親が困難感を持つ子どもの全検査知能指数（FIQ）が有意に低かった。また，読解課題と算数課題ともに母親が困難感を持つ子どもの成績が有意に低かった。

しかし，学業に「困難あり」と母親が回答した子ども34名のうち，13名はFIQが100以上であった。この13名の読解課題と算数課題成績を，同じくFIQ100以上で母親が学業困難感を持たない子ども59名と比較したところ有意差はなかった。

3. 親・家庭側の要因

「iii. 家族環境に関する質問項目」で収集した，家庭環境および母親の属性に関するデータを母親の困難感の有無で比較した（表3）。兄弟の有無，習い事の費用，相談相手の有無，両親の年収（「600万未満」と「600万以上」に分類）に有意な偏りはみられなかった。母親の教育歴を13年未満（高校卒）と13年以上（専門学校卒以上）に分類し，困難感の有無での度数の偏りをみたところ，困難感を持つ母親の教育歴にも有意な偏りは認められなかった。家族アプガー得点にも有意差がなく，親子を取り巻く環境には目立った違いがみられなかった。

一方，子どもの知能・認知能力に問題はないにもかかわらず困難感を持つ母親が存在したことから，さらに詳細な検討として子どものFIQが100以上で困難感を持つ母親（13名）と，同程度のWISC-Ⅲの成績で困難感を持たない母親（59名）の回答を比較した。その結果，この2群間で兄弟の有無，習い事の費用，子育ての相談相手の有無，両親の年収に有意な偏りはなく，家族アプガー得点にも有意差はみられなかった。しかし，母親の教育歴の比較において有意な偏りが認められ，子どもの能力が正常でありながら困難感を持つ母親群では長い教育歴を持つ者が多かった。

表3 親の属性・家庭環境質問項目の回答結果および検定結果
(単位:人*家族アプガーは除く)

困難感の有無のみで比較														
困難感	相談相手		兄弟の有無		年収		塾や習い事の費用		教育歴		家族アプガー			
	あり	なし	あり	なし	600万未満	600万以上	1万未満	1万以上	13年未満	13年以上	N	平均	標準偏差	
なし	77	2	65	15	41	38	37	36	31	45	80	7.60	2.29	
あり	30	4	31	3	18	12	18	15	8	25	34	7.06	2.57	
検定結果 ¹	n.s.		n.s.		$\chi^2(1)=0.30$, n.s.		$\chi^2(1)=0.03$, n.s.		$\chi^2(1)=2.06$, n.s.		$t(112)=1.11$, n.s.			

¹ 「相談相手」, 「兄弟の有無」は Fisher の直接確率法を用いた。

困難感の有無 (FIQ100以上の子どものみ) での比較														
困難感	相談相手		兄弟の有無		年収		塾や習い事の費用		教育歴		家族アプガー			
	あり	なし	あり	なし	600万未満	600万以上	1万未満	1万以上	13年未満	13年以上	N	平均	標準偏差	
なし	57	1	47	11	32	26	30	24	26	32	59	7.59	2.20	
あり	11	2	12	1	7	6	5	8	2	11	13	7.38	2.57	
検定結果 ²	n.s.		n.s.		$\chi^2(1)=0.05$, n.s.		$\chi^2(1)=0.63$, n.s.		p<.05		$t(70)=0.30$, n.s.			

² 「相談相手」, 「兄弟の有無」, 「教育歴」は Fisher の直接確率法を用いた。

IV. 考 察

本研究は学業困難の評価に影響する親側の要因を探ることを目的とした。検証に先んじて、子どもの能力の影響も併せて確認した。

1. 子どもの能力の影響について

WISC-Ⅲ (7歳時)、読解課題、算数課題の全ての検査結果において、母親が学業困難と評価する子どもの成績が有意に低かった。この結果から母親が困難感を持つ子どもは、知的能力と基本的な読解能力、算数能力がすべて低いことがわかった。これは子どもの能力が母親に困難感を感じさせる要因となることを示しており、母親の子どもに対する評価は子どもの能力に応じた正当なものであるといえる。

しかし、子どものFIQが100以上であり課題成績も正常であるにもかかわらず困難感を持つ親も13名存在し、子どもの能力以外の要因が親の困難感を規定する可能性が示唆された。

2. 母親・家庭側の要因について

親の困難感の有無で、兄弟の有無、習い事の費用、

子育ての相談相手の有無、家族アプガー尺度、両親の年収、親の教育歴といった要因を比較すると有意な差や偏りはみられず、親の困難感に強い影響力を持つとはいえなかった。

しかし、子どもの能力が標準以上でありながら困難感を持つ母親に焦点をあてると「親の教育歴」において偏りがみられ、長期間の教育を受けた母親が有意に多かった。この結果から、より長期間の教育を受けた母親ほど、わが子を学業困難と評価しやすくなるものと考えられる。

親の教育歴や学歴と育児意識の関係性については、山岡¹¹⁾と内閣府¹²⁾による調査双方で指摘されている。2つの調査ではともに、親の学歴が高いほど子どもに対する進学希望意識が高いという結果が示され、さらにこの傾向は特に母親で顕著であることも併せて報告されている。また、親の学歴志向が養育態度に影響を与え、過干渉や過保護の生起要因となりうることも大芦ら¹³⁾によって報告されている。本研究で示された教育歴の偏りと関連した困難感も、このような親側の過度な期待や養育態度によるものである可能性が考えられる。

したがって、母親が子どもを取り巻く諸問題の1つ

として学業困難を訴える場合, 子どもの能力評価に加えて, 子どもの生活を見守る母親の属性やそれに基づく養育態度といった別の要因にも注目する必要性があるだろう。

また, 今回は調査対象者が母親であったため母親の属性にのみ焦点を当てた検討に終始したが, もう1人の養育者である父親の属性も踏まえた検討が求められるだろう。

本研究の一部は, 日本教育心理学会第54回総会にて発表された。

本研究に関して, 利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) Koeda T, Ishida H, Ishigami R, et al. Strategies behind the establishment of a developmental cohort study in the Tottori City. *Journal of Epidemiology* 2010 ; 20 : S404-S406.
- 2) 田中 大介, 関あゆみ, 内山 仁志, 他. 発達の困難さと QOL. *子どもの健康科学* 2012 ; 13 : 59-65.
- 3) Ravens-sieberer U, Bullinger M. Assessing health-related quality of life in chronically ill children with the German KINDL : first psychometric and content analytical results. *Quality of life research* 1998 ; 7 : 399-407.
- 4) 北尾 倫彦, 岡本 真彦, 西出 幸代, 他. 学業困難児の類型化に関する予備的研究. *大阪教育大学紀要* 1992 ; 41 : 1-12.
- 5) 武井 祐子, 寺崎 正治, 門田 昌子. 幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響. *川崎医療福祉学会誌* 2006 ; 16 : 221-227.
- 6) 原田 博子. 母親の養育態度に関する研究 I —育てられ方との関連—. *筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要* 2008 ; 3 : 271-283.
- 7) 小林 康江, 遠藤 俊子, 比江 島欣慎, 他. 1 か月の子どもを育てる母親の育児困難感. *山梨大学看護学会誌* 2006 ; 5 : 9-16.
- 8) 恒次 欽也, 庄司 順一, 川井 尚. いわゆる育児不安に関する調査研究 (1) —「育児困難感」の規定要因に関する研究—. *愛知教育大学研究報告* 1999 ; 48 : 123-129.
- 9) Smilkstein G. The Family APGAR : a proposal for a family function test and its use by physicians. *Journal of Family Practice* 1978 ; 6 : 1231-1239.
- 10) 塩川 宏郷. 幼児の養育者用ライフイベント質問票の作成. *自治医科大学紀要* 2007 ; 30 : 165-172.
- 11) 山岡 テイ. 毎日の子育て生活. *ベネッセ教育研究開発センター. 第3回子育て生活基本調査*. 2007 : 12-31.
- 12) 内閣府. 平成13年度国民生活白書—家族の暮らしと構造改革—. 2001.
- 13) 大芦 修, 岡崎 奈美子, 山崎 久美子. タイプ A 行動パターンの発達に及ぼす両親の学歴志向および養育態度の影響. *発達心理学研究* 1996 ; 7 : 41-51.

[Summary]

The aim of this study was to validate maternal factors that influence the evaluation of children's learning difficulties, using a sample of 114 mother-child pairs. All children were in the third grade when data were collected. Mothers were asked about difficulties in their children's learning, their own educational backgrounds, and their home environments. The intelligence and cognitive faculties of the children were measured. We found that 34 mothers evaluated their children as having difficulty with learning and that their children did indeed have below-average intelligence and cognitive faculties. However, 13 mothers evaluated their children as having difficulty with learning, despite the fact that their children had normal intelligence and cognitive faculties. The educational backgrounds of these mothers were significantly more advanced than those of other mothers : home environment was not found to differ from that of other mothers. These findings indicate that not only the child's intelligence and cognitive faculties but also maternal expectations regarding the child's school work and attitudes toward child-rearing influence the evaluation of the child's learning difficulties. If a parent complains that their child is having difficulty learning, it may be helpful to take into account parental educational background and expectations.

[Key words]

learning difficulties, motherhood, educational background, home environment